

〔研究ノート〕

中国の古代思想と丸山敏雄の心

于 振忠

はじめに

今から二十二年前の一九九九年四月、「純粹倫理」という言葉すら知らなかった筆者は、旅行会社の最後の仕事として、中国内蒙古自治区クブチ沙漠に赴いた倫理研究所第一次緑化隊の沙漠植林活動に関わらせていただいた。日本語のガイドとして、緑化隊と一緒に過ごした七日間、日に一度の思いもよらぬトラブルそのものに驚くより、純粹倫理を学び、実践する経営者により編成された緑化隊員のトラブルやハプニングに対するびくともしない、礼儀正しい行動のほうに目を丸くした筆者は、純粹倫理というものに興味を持つようになり、倫理研究所発行の『心のレッスン』や『万人幸福の葉』などの書物を取り寄せ、純粹倫理の世界に入ってみようと勉強を始めた。知らず知らずのうちに大地を潤す春雨の如く吹き込まれてゆく純粹倫理の新風を受け、私の心に広がっていった波紋をいまだに鮮明に覚えている。

そして、純粹倫理の醍醐味に魅了される一方、「宗教でも、主義でも、学説でもない。実行によって直ちに正しさが証明できる生活の法則である」純粹倫理を軸に、一人で倫理運動を起こした丸山敏雄その人に敬意が湧き、中国の聖賢とどのような共通点があるのか、どんな目に見えないつながりがあるのか、探究してみたい気持ちがずっと私の中にあった。ただ筆者の現在の見識と知識では、その探究は到底無理であるが、それでもある種の衝動に突き動かされて――「わが願ひたぐひも無けれじみじみと人類の幸思ふなりけり」の短歌に綴られた丸山敏雄の悲願に魂を震撼させられて――「中国の古代思想と丸山敏雄の心」というテーマで若干の考察を試みることにした。